

【ポスター発表】

**重症精神障がい者におけるセルフ・スティグマと精神症状や機能との関連の検証
ークロス・セクショナル調査ー**

○ 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 山口 創生 (7353)

吉田 光爾 (同上・7777)、種田 綾乃 (同上・8321)

キーワード：セルフ・スティグマ、精神症状、機能

1. 研究目的

国際的に精神障がい者に対するスティグマティゼーションの是正に向けた取り組みが広まるなか、近年、精神障がい者自身が抱えるセルフ・スティグマの改善にも関心が高まっている (Thornicroft et al, 2009)。セルフ・スティグマ (あるいは内なるスティグマ) とは、市民や専門職からのスティグマティゼーションの結果として、精神障がい者が彼らの持つ疾患や障害に関するステレオタイプ的な誤った情報を自己に当てはめ、自分自身をスティグマの対象としてしまう状態である (Bohan et al, 2010; 山口ら, 2013)。

近年のシステマティック・レビューによると、セルフ・スティグマは精神症状と関係する可能性がある (Livingston & Boyd, 2010)。他方、日本では、山本ら (2006) が精神障がい者のセルフ・スティグマと精神症状が関連しないことを報告しているが、精神症状の評価方法に課題を残している。また、日本においては重度の精神障がいを持つ者 (以下、重症精神障がい者) のセルフ・スティグマに関する実証的な研究は非常に少ない (山口ら, 2011)。本研究は、重症精神障がい者を対象として、彼らのセルフ・スティグマと精神症状や機能との関連について実証的に検証することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

1) 対象

本研究の対象者は、厚生労働科学研究費補助金『「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究』における研究参加者であった。平成 23 年 11 月から平成 25 年 3 月に、3 つの精神科病院における全新規入院患者に対してスクリーニング票調査を実施し、重篤度・生活困難度が一定点数以上だった 115 名が研究対象の候補となった。本研究における最終的な分析対象者は、研究参加の同意を得た対象者の中で、分析に必要な基本属性 (性別、年齢、主診断名) とアウトカム・データ、症状・機能評価のデータがそろった 87 名であった。

2) 尺度

本研究のアウトカムとなる対象者のセルフ・スティグマの測定には、Perceived Devaluation and Discrimination scale (PDD) : 得点調整版 (日本語名: Link スティグマ尺度) を用いた。PDD は自記式尺度であり、研究対象者自身が自宅で行った。

対象者の精神症状や機能の評価には、Positive and Negative Syndrome Scale (PANSS), Global Assessment of Functioning (GAF), Social Behaviour Schedule (SBS)を用いた。PANSS、GAF、SBS は対象者の退院時に医師等によって評価が行われた。

3) 分析

セルフ・スティグマと関係する要因を検証するために、PDD 得点と他尺度の得点についてピアソンの相関分析を行った。統計的な有意水準は5%未満に設定した。

3. 倫理的配慮

研究対象者に対して1) 調査概要、2) 調査に関する拒否権、3) プライバシー保護、4) 調査拒否をしても不利益をこうむらないこと、5) 調査途中で棄権できることについての説明を行った。調査の趣旨と研究の参加に同意した研究対象者からは、紙面による同意書をとった。本研究は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会で承認を受けている(A2011-022)。

4. 研究結果

1) 基本属性とアウトカム得点

研究対象者87名のうち43名(49.4%)が男性であり、平均年齢は41.5歳(SD = 11.3)であった。また、約7割の対象者における主診断が統合失調圏であり、約2割が気分障害圏であった。研究対象者におけるPDD得点の平均値は32.4(SD = 5.9)であった。それぞれの基本属性とPDD得点の間に、有意差な差はみられなかった。

2) セルフ・スティグマと精神症状・機能との相関

セルフ・スティグマと症状や機能との関連を検証するために行った相関分析の結果、PDD得点とPANSSの陰性症状得点との間に弱い負の相関が確認されたが($-0.29, p = 0.01$)、PDD得点と他の尺度の得点との間に有意な相関関係はみられなかった。

5. 考察

本研究の結果から、重症精神障がい者におけるセルフ・スティグマは、基本属性や症状や機能の状態とは関係していない可能性が示唆された。国際的な知見から、セルフ・スティグマの程度は、性別や年齢を含む社会的な属性に左右されないと指摘されているが(Livingston & Boyd, 2010)、本研究においても一致する結果となった。また、本研究におけるPDD得点の平均値は、国内の先行研究である山本ら(2006)の調査(32.6, SD = 4.7)と同水準であり、セルフ・スティグマと精神症状の間に関連がないとする知見をほぼ再現する結果となった。重症精神障がい者におけるセルフ・スティグマの改善には、精神症状や機能を向上させる介入とは異なるアプローチが必要であるのかもしれない。

本研究はクロス・セクショナル調査であり、因果関係の説明はできない。今後、長期的な追跡調査によるセルフ・スティグマの性質に関する検証と知見の蓄積が期待される。